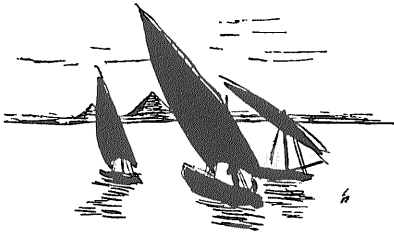


間 違 い だ ら け



1. アメリカの百科辞典

ある日ある時突然エンサイクロペディア・アメリカナの東京支社の若いセールスマンが訪れてきた。

むろん彼は日本人であるが全30巻 18万円の英文百科辞典を 有名人の紹介でセールスしてまわり 買ってもらえた人をせんでんに使おうというもくろみから 要するに名前を貸していただきたい…… もっともそれには2割引でお取引願った上で……ということでお名前だけ拝借するというのではない。

某誌がその現在の読者のみならず 過去あるいは将来の読者に 音楽レコードだの ○○選書だのを これでもか これでもかと 押しつけてくるとよく似ていて そのセールスマンも 18万円という正価をいう前に まずお名前を借りる前提として 買っていただければ2割引するほかに ご家庭の子供さんの年齢に応じて 2万円から3万円の子供百科や カラー写真による動植物辞典などをお礼にさしあげる旨 宣伝しておいて こっちが学者だという前提のもとにぜひこうしたものを座右の友としてもたれるべきで……と勧誘してきたのである。

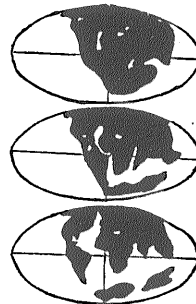
18万円の2割引 つまり144,000円というお金は わたしたち公務員にとっては——そうそう簡単にOKといえる金高のものではない。 それに第一 わたし流に言えば何もわざわざ英語の辞典でま探つてまで——という気があるし さらにアメリカ旅行の経験からすれば なるほどカリフォルニアは住みたいと思うところではあるが そこに実際に住める可能性は縁遠いし そのカリフォルニアをいきなり日本のわたしたちの生活環境にもち込んでも 的はずれのようなもので そんな百科辞典が地質調査所自体で買うべきものでない以上 家庭経済の上に大きなぎせいを払ってまで やすやすと買えるものでないことはまづまづ明らかである。

これでもかこれでもかの先方セールスマンの攻撃に1

(カットとも) くらた・のおお

時間ばかり応待して わたしより20%か30%より熱心に応待されるであろう富裕な学者数名のアドレスを紹介して お買い上げの光栄にだけは浴させていただかなくてすませたものであるが 保険の勧誘員撃退と同じように……逃げかくれすれば別であるが……その攻撃に対する防ぎよは なかなかしんどいはなしであった。

2. 輸入文化ということ



とにかくわたしたちのこの日本では 文化の大部分が外来輸入に依存しているという決定的な事実をみのがすわけにはいかない。

よこ文字で書いてあるものはすべて高級であり 正しいという意味をも含めてよいものと評価されている。 事実ラッシュのなかで “へ”の字 “く”の字になって週刊誌をよんでいる人種より 乱暴

にあたまの上のあみ棚にバックを放りあげて ジャパンタイムスとか よこ文字の書物をよんでいる人種の方がえらそうに思える。 おかしな潜在心理がわたしたちを支配している。 そこでことさら がたがたの木造建築の料理やがレストランカンヌとか カフィーショップボンとかいう名をつけたがる。

地学もまたその例外でない。 まさに他の自然科学の多くの部門と同じく 国内のいろいろな事例 とくちようをとり入れながらも本質的には外来文化の一環として発達してきた。 その多くの専門書 化石や鉱物の図集あるいは朝倉や学習研究社などから出版されている地学関係の普及書は すでに相当な数に達しているが そのなか味は全体からみるとそれほど新味のあるものでなく何かどこかで似かよった臭のする図や表や文字の表現が目につくのである。 つまりそのおおもとは ロンドンやニューヨークで出版されている書物に源を発しているか 取材されているといった感じがのこっている。

時事通信社出版の海洋とか砂漠 地球 山岳など一連の日本語訳のライフ ナチュラルライブラリーは 最近のこの方面の出版物として圧巻のものであるが これとて



日本の国内では取材できないようなものが各巻にみちあふれており市販の教科書 専門書と比較するに当惑するくらいのもうまい表現豊富なネタ ショッキングなざばりそのものの鮮明な写真で埋まっている。そしてそれはいかにも“正確な記事”という感じをも共存しているというわけである。

残念ながらこれは事実であるから

致しかたがない。しかしそれにしても日本の出版物——とくに地学の出版物が内容の新鮮味に乏しいということは別とすると全体として貧相にみえるということは出版業者のせいもあるし著者がそれだけの体裁を要求するセンスに欠けていたということも指摘しなければならぬ。そしてそれにもましていえることはその内容についての表現が理解しやすいかたちでいっていないという致命的なことがらである。

3. 理解しやすい表現

そこで問題になることがらはわたしたちが地球の実態をはなしたり書いたりするのにもつとわかりやすい表現を使わなくてはならないということであろう。

もともと輸入文化のわるいところはそれがなぜ必要になりどういう動機で発見 発明され どういう苦心をして組み立てられたものであるかということをつつかりとばしていきなりわたしたちの眼前に“さあこれだ”と出現してくることでありそのためその

生まれ故郷の環境と 輸入先の つまりわたしたちの環境とをまったく区別せずに襲いかかってくるという点であると思う。地学はとくに自然の土地環境を対象にするものであるからこの輸入文化のもたらす弊害をもちにかぶりがちである。

その結果 鉱物の結晶形をおぼえることが鉱物学であり各地で学者がそれぞれの自分の研究でつけた地層や岩石の名前で地質学とは仰山な名前をおぼえるものと誤解されているケースが少なくない。あるいは地質時代の年数があたまにこびりついて しかもそれがゼロの数がいくつだったか忘れてしまうと てんで満足な答えにならないような——そうした世間ばなれた方面が強調されるので ついつい地学は世俗ばなれた わかりにくいもの 興味をもちにくいものとして扱われがちになる。“生物”につよくても地学に弱い学生が多いのも

そして文部省で地学を本腰入れて重視できなかったのもこの辺に少なくとも原因の中の主要部がある。国の行政面に地質学や地球物理学の意見がもっととり入れられてよいはずの 地盤変動や地表変動の多いわたしたちの国なのに そのわりに一向そういう施策がかえりみられないのも 地質学者自らの自信のなさもさることながらやはり輸入文化からまだほんとうに脱皮しきれない つまり国民1人1人の地学になりきれないがゆえといってこれは決していいすぎではないと思う。

4. 間違いだらけの教科書

そこで 必ずしもその表現が正確でない——つまり間違いがあちこちに指摘される割合も概して多いという



ことになろう。残念ながらそうした間違いが文部省検定済みの教科書に発見された場合“間違いだらけの教科書”といった いささかセンセーショナルな週刊誌の記事にとりあげられることとなる。

実際5月の週刊読売(24日特大号)に 間違いだらけの科学教科書という見出しで 174ページ中に40ヵ所もミスのある地学教科書のことが掲載された。

わたしもすでに20種近い水や地学の書物を出しているので経験していることだが 自分の著した書物に校正上のミスを含め 表現や文章上の誤りがあると 出版後訂正できるまで何か気がとがめるものである。たとえばプラスがマイナスと表現されていたりすると なぜ校正のとき気がつかなかったかと気が一時くさくさするものである。そしてまたそうした誤りはどんなに気をつけていても1冊の書物で2ヵ所や3ヵ所必ずでてくる。

ところで週刊誌のとおりあげた教科書の誤りのなかにはそうした校正もれの誤りも含まれているのであろうがもっと根本的な取り扱い上の誤りが問題にされている。しかもそれがよく売れている教科書に多いとなるとよみやすくするに伴ってどうも誤られやすい表現が増えてきているといった気もする。ところでもしそうだとするとこれはたしかに考えるべき問題である。

もともと地学の現象は 数理や物理 化学の公式 法則などと異なって $1+1=2$ というようにきちんと答えののであるのではなく $1+1$ が1.8か1.9ぐらいになつて それでこれは2になるものとあたまのなかで解釈

してゆく——というようなかたちをとって成り立ってゆく自然科学なのである。それに実験したり 実際に肉眼でその全ぼうもしくはその実態をみきわめることができない。つまり遺跡や片りんや ときによるとむかしの生物のからだのかたちや砂や泥でおきかえられた化石のそのまた外型をみつけることによって かつてそこに生じた現象や生存していた動植物の生活を「推定」するというきわめて非定量的な扱いをしなければならないのだから いきおい1+1=2というようなビタリとした答えは期待できないのが真実の姿である。

だからそこに表現のうえで いろいろさまざまな誤解を生む機会が待ち伏せているとあってよい。とくにその表現を わかりやすい表現で示そうとすると とかくその誤解を生む機会は増加 拡大されやすい。

そこでたしかに 「基本的にはご指摘のとおりだがしかし高校1年生の段階では そのままでは理解されにくいし 著者自身知ってはいても そういう風に書かなかつたり」あるいは「学問的な正確さということで批判されればきりのないことで 学者によってすでに意見のわかれていることもあるし あると書くのはあるいはいい

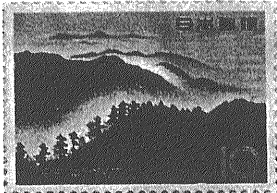
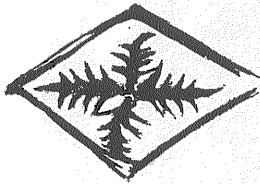
い過ぎかもしれないが ではとってまったく主張するのはいささか大胆すぎる」というような微妙なやりとりが 間違いだらけの教科書と指摘された地学の教科書をめぐって その著者と批判の場に立つ第三者との間にとりかわされるのである。

ともあれ 地学にはその本質からして表現に同情すべき余地がありはするが さりとて Yes か No かがひとむかし前よりはっきりしており こんだ電車のなかで人の足をふんでも “ごめん” とひとことあやまるだけの余ゆうすらもたなくなったジェット時代の社会風潮からみると それだけ慎重かつ安全にもの申す必要があり くわしきは省略しても 正確さと理解のしやすさとが優先させられてよいものと思う。

しかし残念ながら 輸入文化に由来した科学部門では何でも分類されているものはみんな示されていないとよい本でないし 表記されている数字はラウンドナンバーより下のけたまでこまごまと数字が並んでいる方が高級な本だという なげかわしい庶民根性が根強く残っているのが現状である。

理解しやすい表現で 目の前にそのものをみるような書き方で地球について書かれるときに わたしたちはたぶん わたしたちの身近かにしたしみをもって 地球に関するもろもろのできごとを学びとることができるであろう。

(筆者 地質部長 次回からしばらく休載)



地学と切手

堀内 恵彦

金剛生駒国定公園

古くから関西の人々にはなじみの深い行楽地で 大阪・奈良県境の生駒山を中心とした山系と金剛山を主峯とする金剛・葛城・和泉の山系一帯が 公園地域に指定されています。この付近は古くから発達した河内・大和の交通の要地に当たっていたので 山麓には社寺や史跡が多く また山上の展望もすばらしいものがあります。

おもな社寺としては お染久松で有名な野崎

観音 生駒聖天で有名な宝山寺 信貴山 緑起 絵巻で有名な信貴山の朝護孫子寺 奈良朝時代の建造物蓮糸のまんだらで有名な 当麻寺 修験道で有名な金剛山 女人高野として有名な天野山 金剛寺などや楠木正成の居城として有名な赤坂城跡 また1000人の部下で100万の敵をなやました千早城跡などもあります。

公園地域はおおよそ156,246km² 指定は昭和33年4月10日で 切手発行は 昭和37年5月15日 金剛山系の山並をグラビア4色刷に現わしてあります。

(筆者は元所員 現科学技術情報センター)